

京都大学	博士（地域研究）	氏名	平野 淳一
論文題目	近現代イスラーム世界におけるイスラーム連帯と宗教的融和 —アフガーニー思想からその現代的展開まで—		
（論文内容の要旨） 本論文は、中東における主要な政治・社会思想としてのパン・イスラーム主義を取り上げ、19世紀におけるその始動期から現在に至るまでの思想的な展開と、理念の具現化としての文化的・社会的運動に着目して、近現代における「イスラーム世界」の形成がこれらの思想や運動と密接に結びついていることを考察するものである。 第Ⅰ部は、近代のイスラーム世界を扱っている。第1章では、近代における「イスラーム世界」をめぐる認識論的な諸問題を、オリエンタリズムの偏向性などを軸に批判的に取り上げ、合わせて先行研究を俯瞰している。その上で、近現代におけるプリントメディアの重要性を指摘し、そのようなメディアを通じた活動によって「近代イスラーム世界」が「想像」されたことに論究している。 第2章では、パン・イスラーム主義の創始者の一人とされるジャマールッディーン・アフガーニーについて、かれの出自などをめぐる先行研究の議論を整理し、自らの視座を提示した後、従来の通説では、反帝国主義など、アフガーニー思想の対外的な側面が強調されすぎて、イスラーム世界内部に対する主張が何であったか看過されてきたことを提起している。さらに、その主張がイスラーム世界内における政治的な連帯と宗派間和合であったことを、アフガーニーが刊行した雑誌『固き絆』の読解から明らかにしている。 第3章では、アフガーニーの後継者の一人、ラシード・リダーが主宰した雑誌『マナール』を読解し、リダーらが政治的連帯と宗派間対話の理念をどのように発展させ、エルサレムでの会議などを通じて、いかに具体的な活動を展開したかを明らかにしている。 第4章では、アフガーニーのもう一人の盟友とも言えるカワーキビーが、連帯と和合の方途として「イスラーム国際会議」論を展開したことを、その著作の読解を通じて、論究している。 第Ⅱ部では、現代のイスラーム世界を扱っている。第5章では、領域主権国家の誕生、新しいメディアの普及などが、イスラーム世界認識にどのような影響を与えたのかを論じ、第6章では、イスラーム諸国会議機構（O I C）の設立とそれが体現する政治的イスラーム連帯の意義を論究している。O I Cは、第3章のカワーキビーの思想に対応する国家レベルの活動と位置づけられる。 第7章では、20世紀中葉におけるイスラーム連帯運動としての「イスラーム諸学派近接団体」の活動を、その機関誌『イスラームの使信』の読解とともに、分析している。特に、この活動と連動したスンナ派・シーア派の和解が重要な機会として指摘さ			

れている。

第8章は、イスラーム諸学派近接団体を後継するイスラーム諸学派近接アカデミーの活動、その機関誌『近接の使信』の内容などを分析し、両者の違いをそれぞれの時代と国際政治の変容の中に位置づけて論究している。

結論では、以上を踏まえて、近現代におけるパン・イスラーム主義の理念とそれを反映した具体的な活動を総括し、その総合的な理解を通じて、近現代における「イスラーム世界」理念が構築されたことが提示されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、中東における主要な政治・社会思想としてのパン・イスラーム主義を研究対象として、理念とそれを反映した具体的な活動とを合わせて考察しようとする論文である。パン・イスラーム主義に対しては、従来からもその重要性に鑑み、さまざまな研究がなされてきたが、多くの研究がそれを、西洋列強の進出に対して抵抗と反帝国主義を訴える思想とみなしてきた。それに対して、本研究は、アラビア語・ペルシア語・トルコ語の原典を丁寧に読解した結果、むしろイスラーム世界内部における政治的連帯と宗派間の融和や対話を主張するものであったことを明らかにしている。

特に、19世紀における始動期については、その主導者のアフガーニーを取り上げ、その足跡をフィールドワークすると共に、先行研究の批判的吸収とアフガーニーの多様な著作の読解から、その全体像に迫っている。これを1つの原点として、その後のイスラーム連帯と宗派間融和の思想を、彼の思想が弟子や共鳴者たちを通じて広がり、さらにイスラーム諸国会議機構、イスラーム諸学派近接団体、イスラーム諸学派近接アカデミーといった具体的な組織、運動に継承されたことを明らかにしている。19世紀から現代に至るまでを系譜的に位置づけると同時に、中東全域を視野に入れて、「イスラーム世界」認識の成立をプリントメディアなどのメディアの機能と結びつけて論究している点は、非常に優れている。

第Ⅰ部は、オスマン朝などのイスラーム王朝がまだ健在であった近代を扱い、第Ⅱ部ではそれ以降の現代を扱っている。第Ⅰ部の第1章では、オリエンタリズムの偏向性など、研究上の視座や認識論的な諸問題をめぐる整理がおこなわれているが、多くの先行研究を丁寧に読み込んでいる点が評価できる。近現代におけるプリントメディアの重要性については、指摘の通りである。

第2章で取り上げられているアフガーニー、第3章で取り上げられているリダー、第4章で取り上げられているカワーキビーは、いずれも近現代イスラーム思想において重きをなしている思想家・活動家であり、その名はよく知られている。しかし、彼らの著作をこれほどまでに詳細に読解し、分析した論文は、これまでまれである。その点は非常に大きな貢献であり、労作と言える。

第Ⅱ部の第5章以降は、領域主権国家が誕生して以後の時代であり、メディアもさらに普及して、情報の流通も加速した時代である。このような時代におけるイスラーム連帯と宗派間融和の動きとして、第6章ではイスラーム諸国会議機構(OIC)、第7章ではイスラーム諸学派近接団体とその機関誌『イスラームの使信』、第8章では、イスラーム諸学派近接アカデミーとその機関誌『近接の使信』が取り上げられている。丁寧な原典の読解と解析は、ここでも大きな成果を上げている。いずれの組織、運動も、アラブというような枠を超え、イランやトルコなどとも横断的に関わるものとなっており、申請者がアラビア語、ペルシア語、トルコ語に堪能であることが直接的に研究に生かされている。

中東地域研究において欠くことのできない主要な思想としてのパン・イスラーム主

義について、従来の研究が思想家研究に終始してきたのに対し、国際的な組織・運動を視野に入れて思想を政治・社会の現実と結びつけながら、全体的な眺望を明らかにしたことは、本論文の地域研究に対する大きな貢献である。また、この分野における先行研究が言語・国別（アラブ・イラン・トルコ）に行われてきたのに対して、中東における主要な3言語を用いた総合的な原典解析によって、広域的な地域研究を推進していることも特筆に値する。さらに、これらの研究成果を国際会議等で積極的に国際発信している点も非常に優れた点である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年1月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。